



TITLE:

<講演>4. 健康人尿中の抗結核菌性因子について(京都大学結核研究所昭和39年度学術講演会)

AUTHOR(S):

大島, 駿作

CITATION:

大島, 駿作. <講演>4. 健康人尿中の抗結核菌性因子について(京都大学結核研究所昭和39年度学術講演会). 京都大學結核研究所紀要 1965, 13(2): 217-218

ISSUE DATE:

1965-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/51840>

RIGHT:

臨床例や剖検例でも反対側リンパ節への転移が少なからずみられた。

肺癌が胸壁肋膜や横隔膜に浸潤している場合にはそれらの部位のリンパ路を介して転移が招来されるが、横隔膜から腹部のリンパ節に注ぐリンパ路は重要である。

肺癌の転移は解剖学的にみられる正常なリン

パ径路、変異径路または副側路に沿って招来され、逆行性転移は狭い範囲に限られているようである。従って、肺癌の外科的治療に当たっては、正常な解剖学的径路とくに原発巣の位置とリンパ節転移の仮想的な存在部位との関係を念頭におきつつ廓清範囲を決定し、その範囲の徹底的廓清が必要である。

2. 肺における扁平上皮癌の実験的発生

安 平 公 夫 (京大結研内科学第二)

肺における扁平上皮癌の発生は、従来至難のこととされ、その成功を報じた実験は極めて限られたものである。しかし教室の宗実によって行われた実験では、予め結核菌で前処置（皮下注射）されたラットにおいて、発癌剤 20-methylcholanthrene の 5mg を含む Freund の adjuvant を、切開した気管より入れられたビニール細管を通じて肺に注入することにより、80%を越える高率に肺腫瘍を発生させることに

成功し、その大部分が扁平上皮癌であることが明かにされた。この際発癌に先立って肺に多発性の壊死巣が発生し、これを取囲む肉芽織が癭痕性に傾く場合に、そこに再生した気管支上皮に扁平上皮化生が起る。この化生上皮がケラチンを造生して一方では epidermoid cyst となり、また多くの場合には粘膜下層に浸潤を起して、終に典型的な扁平上皮癌となることが明かにされた。

3. 男性ホルモン依存性のマウス乳癌について

峰 下 鋈 雄 (京大結研病理学
塩野義研究所)

従来マウスのホルモン依存性癌は稀とされている。私達は雌に自然発生したホルモン非依存性の乳癌を雄から雄に継代移植することによって男性ホルモン依存性に変えることが出来た。これを Shionogi carcinoma 115 と命名しその生物学的性状を調査し報告した。

1. この癌は dd-s マウスの雄にのみ増殖し雌には増殖しない。去勢雄には増殖しないし、雌でも男性ホルモンを投与すると増殖する。

2. この癌の組織学的所見はホルモン非依存

性の時代も、男性ホルモン依存性を獲得した後にも別段変化を認めない。

3. 癌細胞に染色体を調べるに初代は勿論男性ホルモン依存性獲得後も染色体数及び Caryotype において雌マウスの性質をそのまま保持しておく。

7. Shionogi carcinoma 115 から更にホルモン非依存性癌を、このものから更に新たな男性ホルモン依存性の Clone をつくった。

4. 健康人尿中の抗結核菌性因子について

大 島 駿 作 (京大結研病態生理学)

健康人尿を各種イオン交換樹脂或はセルローズ (Amberlite IR-120, Amberlite IRA-400, Dowex 50, Dowex 2, P-Cellulose) 及び活性炭

によるカラムクロマトグラフィーにより多数の分割に劃分することによって、*in vitro* で著明な結核菌発育抑制作用を有する物質 (B 及び E)

の単離に成功した。収量は何れも極めて僅少で、夫々 29γ/l, 140γ/l であった。

Bは、分子量2000以下、12種類のアミノ酸より成るペプチドである。一方、Eは分子量2000以下、ニンヒドリン反応陰性、Pauly のチアゾ反応陽性の物質で、未だその本体について

は不明である。

Bは 0.1γ/cc, Eは 0.2γ/cc の濃度で毒力結核菌の発育を完全に阻止したが、両者共ミコバクテリウム以外の細菌及び真菌に対しては、250γ/cc の高濃度でもその発育を抑制することが出来なかった。

5. BCGワクチン経口接種について

小 林 裕 (京大結研小児科学)

現行の BCG 皮内接種は局所の潰瘍形成のため普及が阻害される傾向があるので、この対策として、経口接種について検討中である。

人型結核菌の感染に対して、マウスの BCG 200mg 経口接種群は、かなりの防禦力獲得を示したが、5mg 皮下接種群より劣っていた。

BCG 100mg 連日3回計 300mg 経口投与後の「ツ」反応陽性率は、新生児では、投与6ヶ月後最高値 (33.3%) を示し、「ツ」アレルギー

の獲得が認められた。しかし、皮内接種に比べて、弱く、発現が遅く、減弱も早い。過去に BCG 接種を受けたことがない乳幼児の成績もほぼ同等であった。これに対して、過去に BCG 接種歴がある乳幼児では、前者より遙かに高い陽性率を示し、再接種時に経口投与を用い得る可能性を暗示している。この成績は、潰瘍形成が再接種時に著るしいことから考えて、興味があり、今後更に基礎的な検討を重ねたい。

6. 免疫学、ことに結核免疫学に関する二、三の問題

白 石 正 雄 (京大結研細菌血清学)

最初に四つの免疫学説を紹介した。Burnet の clonal selection 説では抗原は preformed clones を select し、抗原に対応する clone の細胞を増生し、ここに特異抗体が産生される。これが not-self recognition (異類認識) である。胎生期には自己抗原にたいして clones は消滅され、普通は自己抗体は形成されない。これが self recognition (自己認識) である。Burnet は immunologically competent cells (免疫能細胞)

に三つのレベルの活動性を想定し、抗体産生、アレルギー、自己免疫、移植免疫、ガンの免疫 runt 病, graft v. host 反応をたくみに説明した。

結核アレルギー反応の細胞溶解現象は、緒方学説にしたがって、抗原と細胞性抗体との反応と解するのが妥当である。

つぎに結核血清中の不完全抗体が結核防衛上一役を演じていることを述べた。

7. SM,INH, PAS 無効肺結核の化学療法

内 藤 益 一 (京大結研 内科学第一)

1) 再化学療法の強化について

喀痰中結核菌培養陰性3ヶ月持続を指標として各種再化学療法術式の効果を比較した結果、

KM 0.7, CS. 0.5, TH 0.3, EB 0.5, SOM 3.0

(何れも毎日) の5者併用の効果が最もすぐれていた。即ち6ヶ月間治療に於てF並に CKz